

dictionary no.114

「言葉を失った dictionary」PDF版を ご覧のみなさまへ

ご覧のPDFはフリーペーパー『dictionary』no.114、2月10日に発行されたものです。今号は創刊19年目にして初の試み、言葉（文章）の一切ないdictionaryをお届けします。演劇、広告、音楽、雑誌、新聞、グラフィック、写真...さまざまな分野で今、何が表現できているのか、規制はあるのか、それともないのか。あるとすれば、その実体は？誌面には、ポートレートのみで登場する、各分野の一线で活躍するみなさんによる全9対談。対談映像、テキストPDFは、web、ポッドキャストにて順次公開いたします。

対談出演一覧

坂本龍一（音楽家）、茂木健一郎（脳科学者）、ヒロ杉山（アーティスト）、箭内道彦（クリエイティブディレクター）、是枝裕和（映画監督）、小林顕作（俳優）、岡田利規（演出家・劇作歌）、Jonathan Barnbrook（グラフィックデザイナー）、米田知子（フォトグラファー）、南島信也（朝日新聞）、中島みゆき（毎日新聞）、須田泰成（コメディライター）、高崎卓馬（広告プランナー）、森山裕之（Quick Japan 編集長）、ECD（ラッパー）、志人（ラッパー）、陣野俊史（音楽評論家）、桑原茂一

Podcast media CLUBKING について

Podcast CLUBKING では多彩なコンテンツを配信しています。

音声作品 映像作品 音楽作品

それぞれ異なった下記のコンテンツメニューよりお好きなものをお選びください。

media CLUBKING へのアクセス方法

iTunes Music Store Podcast Castella <http://www.castella.jp>

ケロログ <http://www.voiceblog.jp>

また下記のURLで直接アクセスも可能です

<http://phobos.apple.com/WebObjects/MZStore.woa/wa/viewArtist?id=191784134>

配信コンテンツ

スケジュールの詳細は Podcast media CLUBKING と WEB にて番組表を公表します。

Podcast

<http://phobos.apple.com/WebObjects/MZStore.woa/wa/viewArtist?id=191784134>

WEB

<http://www.clubking.com/>

インタビュー配信予定リスト

2月第3週

瀧本幹也（写真家）六ヶ所レポート再配信

2月第4週

箭内道彦（クリエイティブディレクター）×是枝裕和（映画監督）

2月第5週～3月第1週

志人（ラッパー）×陣野俊史（音楽評論家）

2月第2週

ECD（ラッパー）×陣野俊史（音楽評論家）

3月第3週

小林顕作（俳優）×岡田利規（演出家・劇作歌）

3月第4週

須田泰成（コメディライター）×高崎卓馬（広告プランナー）×森山裕之（Quick Japan 編集長）

3月第5週

南島信也（朝日新聞）×中島みゆき（毎日新聞）

対談 今、表現者たちは何を視ているのか？

ディクショナリーという方法。

新聞で 世界の「多様性」を表現する

言論メディアの象徴ともいえる「新聞」。いま、その新聞に表現の自由はあるのか？ 権力とメディアの関係、表現（言葉）の問題、インターネットについて、新聞のこれから……など、新聞をとりまく様々なテーマについて、現役の新聞記者二人に“現場”の本音を語ってもらった。

いま、メディアに“表現の自由”はあるのか？

—今日は“表現の自由”というテーマでお話していただきたいんですが、問題になるような箇所はあとで墨をぬりますから安心してください（笑）。映像もその部分だけ砂嵐で、危ないことを言ってる感じはあるけれど内容まではわからない。

中島 上司の悪口にはP音入れてくださいね（笑）。

—いま、僕のまわりですら「言いたいことが言えなくなった」という声がちらほら聞こえてくる。どこかムードとしてみんなそう思っているような感もあるんですが、巨大メディアである新聞に身を置いている記者という立場から、それをどう感じてらっしゃるのかについても伺いたいです。

中島 ここに来る前に少し南島さんと話をして、お互い日々の仕事の中ではそんなに不自由を感じていないということだったんです。もちろん、自分が記事を書くとき、それが間違っていないかということに関してはいくつものソースから裏を取って厳しくやる必要はあるんですが、いざ書いて出すとなったときにはそんなに規制はないですね。特にストレートニュースに関しては、ほとんど感じない。

逆に、そうやって日々なにも感じない一方でなにか悪い方向へ向かっているのかもしれないと思うこともあるんですが、新聞の記事に対して、いろいろな圧力がかかっているんじゃないかとみなさんが思うほどには現場では感じないというのが正直なところですか。どうですか？

南島 そうですね。僕の経験でも、「これは書いちゃダメ」という圧力が社内外からあったという経験はないです。むしろダメと言われると、逆に「この野郎！」と書いてしまうのが記者魂だと思うし、現場の記者はまだそれをなくしてはいない。ただ、自主規制みたいなものがあるんじゃないかという気がしていて、例えば最近、政府税調の本間（正明）さんの問題がありましたね。あの件について僕自身は週刊誌の報道があるまで知らなかったんですが、どうやら記者の中には事実を知っている人もけっこういたらしい。でも誰も書かなかった。愛人については新聞が扱う問題じゃないと判断したと思うんですが、そうやってこれは新聞になじむ問題、これは雑誌、あるいはテレビの問題と、僕たちが勝手に規制してる部分は多少なりともあるんじゃないかな。

— その「自主規制」というのが、僕たちのあいだでもいちばん出るキーワードなんですね。自分の場合はコメディで表現してるんですが、ラジオ局にしてもCSの放送局にしても、誰がダメと言ってるかわからないという状況が常に起こるんです。でも脚本の段階で、例えば「小泉さん」という名前をそのまま使うのはダメだと言われる。それで日本の新聞について考えたとき、どの新聞も同じようなことが書いてあるイメージがあるんです。そこに同じような、誰かはわからないけれど誰かが規制している雰囲気を感じるんですが、現状としてはどうなんでしょう。

南島 僕は社会部の記者から始まって、そのあと政治部に移って首相官邸、自民党、そしていま外務省を担当していますが、いわゆる“記者クラブ”(1)にどっぷり浸かっているわけです。確かに記者クラブ制度があるために情報を出す側のコントロールを受けやすいという側面は否定できない。彼らはメディアの使い方

を非常に研究していて、ここぞというタイミングでニュースを出してくる。すると我々は、頭では分かっているけどそこに飛びつかざるをえない。ただ、だからといって新聞記者がそれに甘んじているかということそうでもないんです。公権力は都合の悪いことを常に隠そうとしますから、それを探り当てるために日々——我々の世界では“夜討ち・朝駆け”と言います——朝と夜にネタ元の家に行って詳しく話を聞いたりしている。そうした積み重ねで記事が出来上がっていることは分かってほしいな、という気持ちがあります。

中島　さまざまな媒体を、“メディア”とひとくくりにしてしまうのもどうかと思うんです。やはりテレビは電波を使いますので、そこが許認可になっている点で総務省の注意を受けやすい立場にあると思います。去年の夏、TBSの「イブニング・ファイブ」という番組が、本来の報道とは関係のない、かなりネガティブな文脈で安倍さんの顔写真を映して問題になりましたね。私がこのときすごく嫌だなと思ったのが、総務省はTBSに対して「放送法」ではなく「電波法」に基づいて調査を命令したんです。この電波法というのは本来、放送内容に関する法律ではなく技術的な法律なんですね。その中に「電波の秩序を乱してはいけない〜」といった包括的な文言がありまして、それを根拠とした。最終的には放送法に基づく嚴重注意という形になったんですが、電波法を拡大解釈してまで命令を出すことに対して、すごく違和感を感じたんです。私は政治の世界にあまり詳しくありませんが、やはりここ数年、特に安倍さんの名前が首相候補として挙がるようになってから、メディアに対する規制の動きが多くなった気がします。そのあたり、南島さんはどう感じてらっしゃいますか。

南島　僕は決して安倍さんが直接指示をしたとは思わない。だけど安倍さんが総理大臣になった後で、総務大臣からNHKに対して、短波ラジオ放送で拉致問題を重点的に放送するよう指導がありましたね。あのことも含め、周辺にいる人たちが安倍さんをおもんばかりで、そうしたほうが安倍さんが喜ぶだろうと思ってやっているふしがある。そういう面で、やはりテレビは新聞にくらべて権力に弱いと感じることがありますね。しかし影響力という点では、テレビのほうが新聞

よりはるかに大きい。いま、権力側はテレビというメディアをものすごく重要視している。だからこそ、権力側にうまくコントロールされやすいのではないかな、という感じがします。

この先、どういう新聞を作るのか

— 僕らから見ると、新聞もテレビも雑誌も、グループ企業でつながったものがほとんどだから、テレビで言えないことは新聞でも雑誌でも言えないんじゃないかと疑ってしまうところもある。そこで世論をコントロールしてるんじゃないかと。さらにそういう現状に対して、個人がなにか言ってもしかたないというムードになってきてるんじゃないかを感じるんです。その“雰囲気”を、僕らが見られない部分を見ている新聞記者の方に正してほしいと思うんですが。

南島 難しいですね(笑)。僕が率直に感じるのは、もう限界だと思うんです。朝日新聞は800万部と言われますが、それぞれ考え方が違う読者を対象に、これはこうだと打ち出すのはもう無理なんです。僕個人の考えを言えば、例えば大衆紙なのか高級紙なのかというように、ターゲットを絞った方がいい。絞らないから、曖昧な論調でお茶を濁すことになってしまう。

中島 毎日新聞は幸いもう少しコンパクトな部数ですが(笑)、作っている側も“見えないマス”を意識しているというのはありますね。最近の私の仕事で言えば、ちょっと新しい書き手の方に原稿をお願いしたときに表現の問題が出てくるんです。その方が新聞で使うにはまだすこし早い言葉で表現された場合、私はそのまま載せたいと思うけれど、やっぱり読者から「わかりません」と言われると思うと「すみませんが、もう少し新聞向けの言い方で」となってしまう。そのさじ加減というのは、常に考えてますね。

南島 読者の新聞の読み方を考えたとき、まず1面を見て、次にひっくり返して社会面を見ているんですね。だから事件の記事というのは、新聞の中でも非常によく読まれている。これが政治部の担当する2面～4面となると、まったくと言

っていいほど読まれない(笑)。ほとんど永田町と霞ヶ関の読者にしか読まれてないんじゃないかな。例えば社会面でいい記事を書くとすぐに読者からレスポンスがあるんですが、政治部の記事に反応するのは政治家と役人くらい。そういう対極にあるような仕事を経験する中で、これから新聞はどうなるんだろってことをすごく考えます。表現の話で言えば、政治面でも例えば年金のような多くの人の関心事については柔らかく、わかりやすく書く努力をしなくてははいけない。だけど永田町の政局は政治家の権力闘争なんだから、これは関係者向けに書いたほうがいいんじゃないかという気がします。

中島 私はここ1年くらい、「まいまいクラブ」(2)という読者サービスのウェブサイトを担当していて、これは少し自慢すると、全国紙では最初に読者が記事本体にコメントをつけられる機能をつけたサイトなんです。で、そこで顕著に現れたのが、例えば公定歩合の上げ下げに対する記事にはほとんどコメントがつかない。私は経済部にもいたのでとても大切なことだとは思いますが、やはり一般の方の関心は自分の身の回りに起きるかもしれないことが中心なんですね。最近でも、道路特定財源についてのコメントは10数件ですけど、いじめ問題になると百件以上つくこともある。ただ今後、その反応がニュース価値の判断になれば新聞も変わっていくと思うので、そこは育ててほしいと思ってるんです。

南島 僕たちよりだいぶ上の世代の記者は、傲慢な言い方をすれば自分たちが読者に教えてあげるといった姿勢があったと思うんです。それがいまは、記者も世論の関心を見逃すことができない。読者がなにを求めているかを考えながら記事を書かなければ、どんどん読者は離れてしまう。若い人たちはネットでニュースを見ているし、僕も毎朝ケータイサイトでニュースを見るんですが、普通の人ならそれで十分なんです。だから今後、新聞の読者が増えることはありえない。じゃあ、どうやってその減少を抑えるか。僕が定年になる20年後くらいまで、新聞業界は大丈夫か? と思ったりするんですね。

中島 たぶん逃げ切れないんじゃないですか(笑)。そのくらい、この先どういう新聞を作るのか、誰にむかって何を伝えていくかについて危機感を持って考え

なきゃいけないと思います。そもそも、記者ってそんなに偉いのかと思うんですね。もちろん多く取材をしますから、そういった経験はあるでしょうが、だからといって上から目線でものを言うのはすこし違うんじゃないか。ウェブサイトでも、記事に対してその道の専門家の方からコメントをいただくこともあるんですが、ハッと驚かされることが多いです。そういったことを、記者はもっと謙虚に受け止めないといけない。

南島 記者って、毎日毎日勉強しながら記事を書いているんですね。だからその筋のプロフェッショナルから見れば、内容が幼く見える場合も当然あると思う。いまは、その要求に追いつけないほど物事が多様化してきていて、昔に比べると記者は相当忙しくなっている。自分もどれだけプロの人が見て納得するものを書けるかといえば、これはまったく自信がないですよ。

中島 読者と記者のどちらが偉いとか、どちらが教えてあげるというのではなくて、そこでもう少しやりとりがあったほうがいいと思うんですね。その仕組みとしてどういうものがあるのかを、ここ最近考えているんです。インターネットでのコメントにしてもいいことばかりではなくて、やはり記者に対する誹謗中傷の類もある。それに関してはいろいろな考え方があると思いますが、私は現状では一方的に攻撃しているようなものは掲載しないようにしてるんです。それはいま、こうやって新聞社と読者がやりとりをして次のものを作っていこうとしている場を、心ない言葉でつぶしてほしくないという思いがある。しかもネットで飛び交う誹謗中傷というのは記事の一部分が文脈から離れてネット上を回っているものに対して行われ、増幅されていくことが多い。その悪循環に入り込みたくないという気持ちはすごく強いですね。

南島 ネットで個人が発信できるようになって、そのことに対して記者が萎縮するということはない？

中島 (攻撃的な書き込みは) こういう言い方もよくありませんけど、正直ウザイですよ。でも向き合っていかなければいけないと思うんです。なにより腹が立つのは、ネットって、上手に使えばこんなに便利な道具はないのに、そのこと

によってネット自体の価値をおとしめていることに気づいていないことなんです。南島 例えば北朝鮮の拉致問題では、拉致自体は絶対に許せない犯罪だと思うけれど、それで北朝鮮の国民も含めてすべてを否定するのはどうかと思うんです。核の問題にしても、六カ国協議に集まった国のうち日本と韓国を除いてみんな核を持ってるわけですね。国際政治というのは、そういうダブルスタンダードが常にある。だから北朝鮮からすれば、「なぜ自分たちが核を持っていけないんだ」という理屈は、理屈として成立するわけです。僕は北朝鮮が核を持つことは阻止しなければならないと思うけれど、彼らがそう主張する権利は認めなければならないし、その権利を認めるのが多様性だと思う。そういうものがどんどんなくなって、世論が一色になるのはすごくおそろしい。北朝鮮を少しでも擁護する意見があれば、みんなでバッシングする。これはおかしいと思う。

メディアが守っていくもの

— 子供みたいな質問ですが、新聞を作ってる人は世の中をよくしたいと思ってそこにいるんですか？

南島 もちろん最初、新聞記者になった動機としてそういう思いはあったと思います。ただ、記者になって10数年たったいま、新聞記者をやってる醍醐味というのは歴史の現場に立ち会えるというのがすごく大きいですね。やっぱりその現場に立ち会っていると、震えるんですよ。

中島 私は逆に、世の中をよくしようということを振りかざすのは危険なんじゃないかと思っていて、だから入社試験でも「いろんなものが見たい」と言ったし、その気持ちはいまも変わっていません。で、記者の仕事をしていて思うのは、世の中は想像以上に多様なんだということ。「よい社会」ってどんな社会かを考えたとき、自分とは違う考えももちろんあるわけです。だからよい世の中を実現するために働くというよりは、やはり自分の目でいろんなものを見てみたい。その上で判断したいという気持ちが強いんですね。それで記者の醍醐味はというと、

自分が書いた記事によって世の中が変わっていくという瞬間があるんです。特ダネを書いて、それで大騒ぎになって、それをうやむやにする人たちがいて、またそれを追及して……という繰り返しを続ける。その現場にいるときはドキドキしますよね。そういうとき、記者になって仕事をしたなという気がします。

南島 確かに「よい社会」ってそもそもどういうものなのか、という問題はありますね。例えば消費税ひとつとっても、僕はいま上げるべきではないと考えているけれど、社内でも違う考えの記者もいるわけです。僕はそれでいいと思うんです。だから社論としてなにかを打ち出す時代ではなくて、いろんな考え方が同じ会社の中であって、そういう多様性を打ち出すことで読者にも考えてもらう。そういうあり方が健全だと思うんです。

中島 毎日新聞は、よく社論がハッキリしないと言われますが、それぞれの記者の意見が紙面に反映されやすい環境でもあります。そうじゃないと不自由だと思うんですよ、やっぱり。

南島 僕は毎日新聞に社論がないとは思わないけれど、ただ、唯一守らなければならない社論は、戦争は絶対やってはいけないということ。それは朝日も毎日も一緒に、どんなことがあっても貫き通さなければならない。

— それは本当にそうですか？

中島 ま、多様性がありますので、そう思っていない人もいるかもしれませんが。

南島 いるかもしれないけど、社論としては絶対に戦争はしてはいけない。それは両社同じだと思います。

— それを聞くだけで、すごい収穫です。いま、メディアがそういった機能を果たしてないのではないかと思っていたので。

南島 安倍さんにしても戦争をしたいとは思ってないはずですが。ただ国際情勢がそれを許さなくなったときにどうなのか。そうなったときなるべく日本も何らかの形で参加できるように憲法の改正や集団的自衛権の見直しを考えているんでし

ようけれど、その最後の一線はメディアが団結して守っていかなくてはいけない。そうでなければ、また戦前の繰り返しですから。

中島 たぶん言論の自由についても、「今日から自由を禁止します」と宣言してなくなることはないと思うんです。むしろ「まだこんな自由だ」と言ってるうちにひたひたと自由がなくなっていく。過去の例を見てもそうですね。そうならないためにも、記者はもっとアンテナを張らなければと思います。やはりメディアがメディアとして機能するには、言論の多様性を否定する世の中を作らないというのが大原則だと思うので、そこは各社を挙げて、いい意味でのメディアスクラムを組んで守っていかなければいけないと強く思います。

“言葉”は凶器になる

— 僕のまわりの若いクリエイターたちが海外に行くと、みんな一様に言うのが「どうして日本ってこんなに評判が悪いんだろう」ということなんです。日本はこれだけの経済大国であるにもかかわらず、ほかの国からよく見られない。それはなぜだと思いますか。

南島 PRがヘタなんじゃないですか。日中の歴史共同研究というのが北京で始まったんです。そこで日本側は、中国側は戦前の日本のことばかり言うけれど、戦後日本が平和国家として貢献してきたことも中国で教えてほしいと主張した。戦後の両国を研究すると、中国側は天安門事件とか触れられたくない問題もあるわけです。それでも一緒にやろうとなった。日本はこれまで各国とそういった試みをやってこなかったわけで、そういう面では、政治家や役所のPRが下手だったんでしょう。

中島 評判が悪いにもいろんな次元があると思いますが、日本人が日本という国の文化なり実力について、リソースを知らないということがあると思うんです。例えばフランス人で日本のことを好きな人のほうが陶芸や浮世絵に詳しくだったりしますし、技術的に詳しい方は日本の技術力を讃えてくれたりもしている。

— そうやって日本の文化を讃えてくれる一方で、国際政治的に日本はアメリカに追従して自らの意見を持っていないという批判をアーティストのレベルでさえ受けてしまう。その現状についてはどうですか。

南島 日本が対米追従だとよく批判されますが、それはまったくその通りです。ただ、現実的な外交オプションを考えたときそれ以外の選択肢があるのかというのは、極めて難しい問題です。北朝鮮のミサイル脅威がある中で、日本人が平和に暮らせるのはアメリカの核の傘の下にあるからですね。日米安保条約があるからこそ平和を享受してるというのは否定できない現実なんです。そういう中でアメリカがイラクに派兵して、それを後方から支援してくれと言われたときに「NO」という選択肢は、国際政治上ありえない。対米追従と言われて喜んでいる人はいないけれど、そういう現実があるんです。

中島 国家のレベルと個人のレベル、人の交わりはそれぞれあると思うんです。例えば私たちは9・11のあとで『非戦』(3)という本を作ったわけですが、そのときアメリカの市民の方のブログを見て、様々な考え方があることにすごく安心したんですね。それが日本の場合、やはり言葉の壁が大きくて個人レベルでの発信がなかなか外に伝わらない。だから外から見ると、日本人がよくわからない塊に見えるのかもしれないという気がします。

— 自分なりの主張があればいいんですが、さっきおっしゃったようにみんな政治面を読まないから、反論する言葉を持ってないんですね。

南島 その点で言うと、安倍さんは総理大臣になってすぐ中国と韓国に行きましたね。年明けはヨーロッパでした。これまでの総理大臣であれば、就任直後にまずアメリカに行くんですよ。取材をすると、アメリカ側も「なぜ来ないんだ」と言ってきてるらしい。どうも安倍さん自身、日米関係が基軸ではあるけど、もっと方向性を広げて行くべきだと考えているな、と思うんです。そういう面も、紙面から伝えられたらいいんですが。

中島 政治面は、おじさんが会議してる写真ばかりで、それだけでスルーしちゃ

いますから(笑)。

南島 そうなんだよね(笑)。だから作りも変えなきゃいけない。

中島 遠目で見てると、時々政治家のパフォーマンスがあるくらいでほとんど変わらない。

南島 小泉さんはスタジャン着てブッシュとキャッチボールしたりと、なかなか映えたんですよ。安倍さんはこの前、始球式をやったけど、あまり運動のほうは……(笑)。

中島 先日、CHAGE & ASKAのコンサートにいらしたときも、ベージュのブレザーだったんですが……。良いものを着てらっしゃるな、という感じでしたね(笑)。でも、もっと政治をかみ砕いて伝える場があってもいいと思うんです。私から見ると、なぜそんな難しいものの言い方をしなくてはいけないのかしらと思う。私は通産省(現・経済産業省)の記者クラブに長くいたんですが、そうすると役所のワーディングに染まっていく自分というのがあるんですね。役所言葉で記事を書いてしまって、上司から「結局これはなんなの?」と言われて「それはこういうことです」と答えると、「じゃあ最初からそう書け」と怒られたこともありました。もちろん取材対象と同じ言葉で話さないと返ってこない反応もある。それは取材のテクニクとしてやればいいことであって、人に伝えるときには役所言葉をそのまま書くのは極力避けなければいけない。その点で政治部の原稿はハードルが高いなと、新聞社の中にも思うことがあります。

南島 なるほど。それは政治家にも言えることで、小泉さんは役人が案件を説明するのに、A4の紙一枚以上は受け付けなかったそうです。そうすると役人もものすごく簡潔に説明しなくちゃならない。普通は分厚い書類を用意するんですが、小泉さんに言わせると「役人の話を聞くと、直感が鈍る」らしい。だから彼は役人言葉を使わなかったし、ものすごく分かりやすい言葉で話しましたよね。

中島 「直感が鈍る」というのがいいですね(笑)。最初に記者クラブの話が出ましたが、もし私が霞ヶ関の広報室長だったら、のべつまくなしどうでもいい記者発表をやり続けて記者を会見室に縛りつけると思うんです。そこからどう抜け出

て、独自の取材をするかが重要かもしれない。

南島 いまは役所のホームページがかなり充実していて、マスコミに発表したものは即日そちらにも掲載されています。だからそれと新聞記事を読み比べるのも面白いと思うんですね。いろいろ考えてる記者なら、そこに自分自身の取材結果や価値判断を付け加えて記事にするだろうし、そうではない、ヨコのものをタテにしたような記事もあると思う。あるいは新聞に載らなかったものはボツになってるわけで、新聞社の判断がわかる。いまは読者も自分で情報を得ることができるので、そういうこともぜひやってほしいと思います。

中島 確かにオープンになっている情報の量は、昔と比べものにならないくらい多いですからね。

— では今日のところは、表現の自由に関しては、現場ではそんなに大きな不自由を感じてないと捉えてよろしいですか。

南島 やはりそこに戻るわけですね(笑)。ここ数年来の流れは、権力側が規制をしようという方向になってるのは間違いないです。ただ僕が感じるのは、もはや権力側のターゲットは残念ながら新聞ではないということ。やはり雑誌のスクープやテレビの影響力をすごく気にして、新聞が取り残されてる感じはすごくします。

中島 それはいい意味に解釈をすれば、新聞は権力側が規制をしてはいけないものだと思われている。そこを規制すれば、政治家自身も危なくなると思って新聞には比較的寛容でいてくれるのであればいいんですが。単純にスルーされてるならばちょっとつらいものがありますね。

南島 最後にね、言葉や表現というのは使い方によっては凶器になる。我々も記事を書くことによって誰かを傷つけることになるかもしれない。それは十分承知しています。だからいま、なにかを表現をする人にもその持つる力というものを少し慎重に考えてほしいと思います。

中島 それは、本当に新聞記者も含めて言えることですね。やはり言葉というのはすごく大切なものですから。

南島 それを肝に銘じなければ、言葉が権力側の規制の対象となってしまうと思うんですね。

注釈

(1) 記者クラブ

首相官邸、省庁、地方自治体、警察などに設置された記者室を取材拠点にしている、特定の報道機関の記者が集まった取材組織。日本独自のシステムであり、その利点と弊害をめぐっては賛否が分かれる。2001年、前長野県知事の田中康夫が「脱・記者クラブ宣言」を発表し話題に。

(2) 「まいまいクラブ」

<https://my-mai.mainichi.co.jp/mymai/>

(3) 『非戦』

2001年、幻冬舎刊。監修：坂本龍一。9・11の後、坂本龍一らが中心となり、インターネット上で交わされたメーリングリストを単行本化。村上龍、辺見庸、桜井和寿、大貫妙子、バーバラ・リー（米・カリフォルニア州選出の連邦下院議員、民主党）はじめ、世界中から多くの著名人が参加した。

プロフィール

南島信也（みなみしましんや）

1965年生まれ。朝日新聞社社会部で警視庁など事件担当を経て政治部（現・政治グループ）に。小泉政権では首相官邸、自民党などを中心に取材活動を行ってきた。現在は外務省担当として、日米関係がメインテーマ。

中島みゆき（なかじまみゆき）

1989年毎日新聞社入社。97年から経済部で環境やエネルギー問題を取材。98年、石油公団不良債権問題をスクープした。02年から学芸部で放送業界を担当。読者サイト「まいまいクラブ」を立ち上げ、管理人を務めている。